TSUBOHORI

平成12年度（2000）

姫路市埋蔵文化財調査略報

姫路市教育委員会

はじめに

姫路市は古くから播磨の中心地として発展してきました。人々の生活の痕跡は遺跡という形で地中に残されております。そうした遺跡は現在当市において約1000ヶ所確認されています。本年度は21世紀の幕開けという新しい節目の年となりました。温故知新という言葉がありますように、新たなる時代を前にした今、改めて我々の先祖が大地に残した営みの跡を振り返るのに好機と言えます。

開発などにより、地中から掘り出された遺跡は発掘調査という手法により記録が取られます。その成果は市民の皆様の共有の財産として、広く周知され継承されていかねばなりません。しかし成果を正確に報告するためには、長時間の地道な整理作業と研究が必要となります。そこで本書は調査した遺跡の概要だけでも、速やかにお伝えするために刊行しました。内容は十分とはいえませんが、この姫路の地で生活してきた先祖の足跡を知る一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、ご指導・ご協力賜りました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

姫路市教育長
高岡保宏

例言

1.本書は、姫路市教育委員会が平成12(2000)年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の略報である。
2.発掘調査に伴う遺物・図面類は、全て姫路市教育委員会が保管している。
3.本書の執筆は、各調査担当者が行い、編集は中川が担当した。
4.平成12年度発掘調査地の位置図は、国土地理院20万分の1図を、各調査地の位置図は同2万5千分の1図を使用し、方位は全て上が北である。また姫路城跡の発掘調査地の位置図は姫路市作成の『特別史跡姫路城跡(城郭図)』を使用した。
5.調査にあたっては、下記の方々・機関の指導・協力を得た。(五十音順、敬称略)
今里幾次、味呑英和、医療法人三栄会ツカザキ病院、株式会社ゴトダ建工、株式会社ジオマップ、株式会社整理回収機構、国立姫路病院、清和建設株式会社、生和建設株式会社、兵庫県教育委員会、兵庫県姫路土木事務所、平野石油株式会社、有限会社大西殖産
6.遺物の整理および図版の作成には、石川ゆずは、境野佐知子、佐藤朋子、田中章子、中山美歩、野村知子、萩原寛子、藤戸翼、藤村由紀、圓尾かさね、宮長秀和、森山展江、山田郁子、山本雅子、吉野弘子の補助を得た。
7.表紙は、(仮称)姫路駅周辺第3地点遺跡新福祉センター建設予定地を東から写した写真である。
8.裏表紙の写真は表紙と同じ遺跡において出土した鴟尾(しび)である。

発掘調査の動向

平成12年度は、22件の埋蔵文化財の発掘調査を行った。本年度は例年に比べて民間の開発に伴う小規模な調査が目立った。辻井遺跡では幅の狭いトレンチ調査ながらも、戦前に縄文時代の人骨が出土した地点の調査を行い、同時期の土坑や墓を検出している。和久遺跡ではこれまで知られていた範囲よりも南に遺跡が広がっていることが確認され、弥生～古墳時代の竪穴住居跡が見つかった。船場川東第6地点遺跡ではカマドを持つ古墳時代の竪穴住居跡が検出されている。太市向山遺跡においては古代の瓦の出土が見られ、大市駅家の実態に近づく資料が得られた。姫路駅周辺第3地点遺跡においては市之郷廃寺想定地の調査が行われた。鴟尾や区画溝の検出といったことから、これまであまり明らかではなかった同廃寺の解明の手がかりを得ることができるなど、ささやかながら地域の歴史を解明するうえでの成果が多かった。

遺跡の試掘調査は土地区画整理事業に伴い阿保地区と英賀保駅周辺で実施され、新たに4遺跡が確認された。

特別史跡姫路城跡では、A地区において中ノ門から大手門につながる街路が検出された。この街路の下を暗渠が通っていることが判明し、江戸時代の街路構造の一端が明らかとなった。国立姫路病院では武家屋敷内の池が検出されるなど、武士の生活を彷彿とさせる遺構が見つかっている。

発掘調査成果の現地説明会は、城南線の調査において平成12年10月29日に実施した。

平成12年度　発掘調査地の位置図

番号	遺跡名	調査次数	調査地	調査面積	調査期間	調査原因	調査担当者
1	(仮称)姫路駅周辺第3地点遺跡		姫路市市之郷	1,026㎡	2000.07.15～2000.11.30	住宅建設	中川
2	(仮称)姫路駅周辺第3地点遺跡		姫路市市之郷	2,500㎡	2000.07.18～2001.03.15	新福祉センター建設	中川
3	辻井遺跡	25次	姫路市辻井一丁目	94㎡	2000.04.18～2000.05.27	宅地造成	小柴
	辻井遺跡	26次	姫路市辻井一丁目	42㎡	2000.09.21～2000.10.20	宅地造成	小柴
4	今宿丁田遺跡	8次	姫路市今宿字鯖ノ井	25㎡	2000.08.05～2000.09.04	ガソリンスタンド建設	小柴
5	太市周辺確認調査	1次	姫路市太市中・西脇	43㎡	2000.12.06～2000.12.14	下水道工事	小柴
6	(仮称)船場川東区整遺跡　第6地点	15次	姫路市飯田	30㎡	2000.07.07～2000.08.25	防火水槽設置	小柴
7	佐土・東芝崎遺跡	2次	姫路市別所町佐土	189㎡	2001.03.01～2001.03.30	マンション建設	大谷
8	別所構居跡	15次	姫路市別所町別所	192㎡	2000.09.07～2000.11.25	土地区画整理	小柴
9	山ノ鼻遺跡	1次	姫路市林田町下伊勢	80㎡	2001.01.24～2001.02.27	道路新設	多田
10	(仮称)小川散布地	1次	姫路市花田町小川	35㎡	2001.01.31～2001.02.27	下水道工事	大谷
11	和久遺跡確認調査	1次	姫路市網干区和久	64㎡	2000.10.18～2000.10.27	病院建設	小柴
12	阿保地区試掘調査	2次	姫路市阿保	260㎡	2001.01.30～2001.03.29	土地区画整理	中川
13	英賀保駅周辺試掘調査	1次	姫路市町坪・苫編・山崎	432㎡	2000.12.29～2001.03.23	土地区画整理	中川
特別史跡　姫路城跡							
14	A地区　都市計画道路城南線整備	188次	姫路市本町68	357㎡	2000.07.04～2000.12.15	道路建設	森
15	A地区　家老屋敷跡公園整備	187次	姫路市本町68	430㎡	2000.07.04～2000.10.31	便益施設建設	森
16	砥堀・本町線共同溝整備	194次	姫路市本町68・総社本町	92㎡	2001.02.28～2001.03.30	共同溝整備	秋枝・森
17	内曲輪　姫路城防災施設整備	192次	姫路市本町68	88㎡	2000.12.26～2001.03.16	防災施設整備	森
18	市道城南20号線電線共同溝予定地	189次	姫路市本町68	120㎡	2000.08.19～2000.11.16	電線共同溝新設	多田
19	国立姫路病院更新整備　第8-1次	190次	姫路市本町68	30㎡	2000.09.20～2000.11.08	病院更新整備	多田
20	国立姫路病院更新整備　第8-2次	191次	姫路市本町68	245㎡	2000.11.28～2001.03.14	病院更新整備	多田
21	国立姫路病院更新整備　第8-3次	193次	姫路市本町68	192㎡	2001.01.30～2001.03.16	病院更新整備	山本
22	マンション建設に伴う確認調査	195次	姫路市本町	10㎡	2001.03.22	マンション建設	多田・森

発掘調査一覧

発掘調査の体制

教育委員会事務局

教育長　髙岡保宏
教育次長　池田　宏

文化部

部長　西沢徹哉

文化課

課長　牛尾　誠

調査担当

係長　山本博利
　　秋枝　芳
技術主任　大谷輝彦
　　多田暢久
　　森　恒裕
技師　小柴治子
技師補　中川　猛

城南線現地説明会

1.（仮称）姫路駅周辺第3地点遺跡

キャスティ21住宅建設予定地

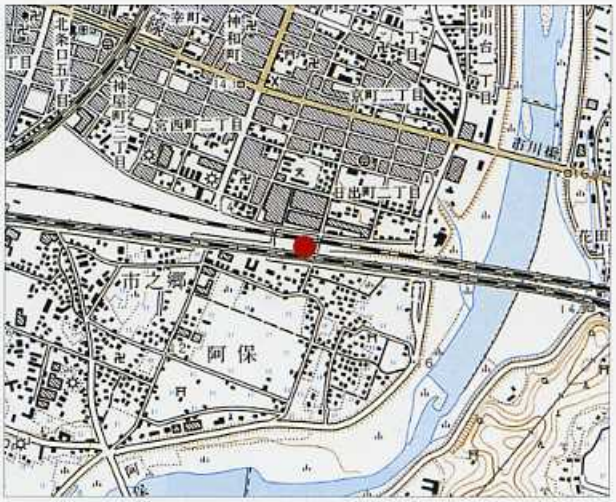
1.所 在 地　姫路市市之郷
2.調査面積　1,026㎡
3.調査期間　平成12年7月15日～平成12年11月30日
4.担 当 者　中川

姫路駅周辺第3地点遺跡は山陽本線の高架事業に伴い発生した、広大な貨物ヤードの跡地において確認された遺跡である。同地点は戦前から市之郷（いちのごう）廃寺や市之郷遺跡として知られていた場所である。しかし分布調査の結果、遺跡の範囲は広がり、また内容も複雑であることから、従来の遺跡地を包含した上で、仮称している。

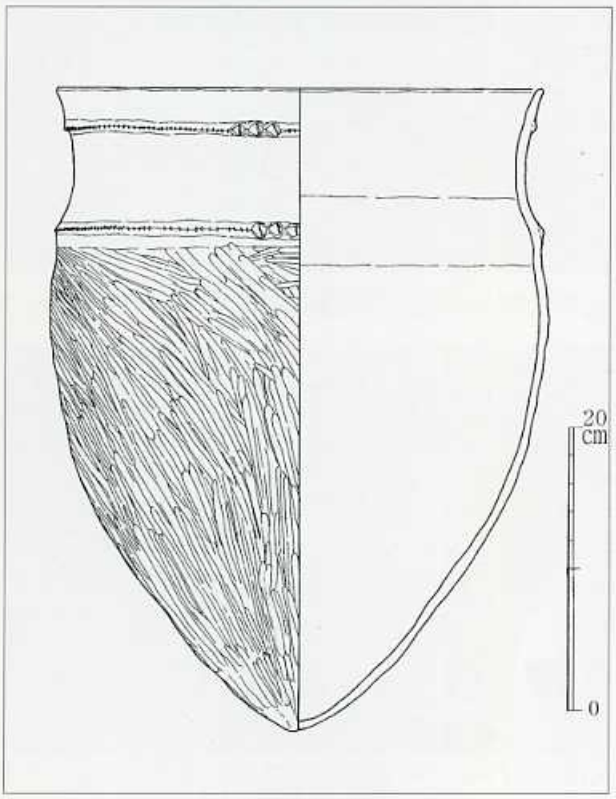
調査は姫路市の計画する市営住宅の建設に先駆けて実施したものである。検出した遺構は弥生時代の溝状遺構と平安時代の掘立柱建物跡である。

弥生時代の溝状遺構は調査区の西部で確認され、中期後半の壺、甕、高杯などが出土した。他に同時期の遺構、遺物は全く確認されなかった。しかし土層確認のため断ち割りを実施したところ、遺構検出面から30㎝下で一部土壌化した層を確認した。そこから突帯文土器が1点出土した。この土器は全体の1/4程度であるが、口縁部から底部までが残存しており、器形が良く判る。この土器は縄文～弥生時代へと移り変わる時期に使用されたものである。市内では今宿丁田（いまじゅくちょうだ）遺跡や丁（よろ）・柳ケ瀬（やながせ）遺跡などで出土しているが、この土器ほど残りが良いものはなく、貴重な資料を得ることができた。

掘立柱建物跡は5棟確認された。うち1棟は5間×5間以上の比較的規模の大きな建物である。柱穴から11世紀後半の須恵器皿と椀が出土した。棟方位はN37°50′Eである。他に2間×2間が2棟と3間×3間が1棟、4間×3間が1棟検出された。これらの4棟は棟方位がN18°～19°Eと揃っており、これら4棟の建物が一定の軸にそって建てられていることが判る。先の1棟とどう関係するのかは、柱穴の切り合いがないことや遺物が出土していないため不明である。しかし包含層中からはそれ以前や以後の遺物の出土がないことから、両者の時期は比較的近接するものと考えられる。これらの建物の性格については今後の周辺の調査の進展を期待したい。



調査地の位置図（「姫路南部」）



突帯文土器

掘立柱建物跡（西から）

2.（仮称）姫路駅周辺第3地点遺跡

新福祉センター建設予定地

1.所 在 地　姫路市市之郷
2.調査面積　2,500㎡
3.調査期間　平成12年7月18日～平成13年3月15日
4.担 当 者　中川

調査は姫路市が計画する新福祉センターの建設に先駆けて実施した。当該地は市之郷廃寺推定地に該当する。調査地の道路をはさんだ北側に薬師堂があり、そこに市之郷廃寺の塔心礎がある。これは元来、本調査区の付近にあったものを鉄道建設に際し今の地に移設したものである。

遺跡は弥生～室町時代にわたる複合遺跡である。調査区のほぼ中央には旧河道がある。河道内には弥生時代前期末頃の遺物が見られ、それ以後の遺物はないことからそのころには埋没したものと思われる。埋没直後は土地が良くなかったのか、これを避けるように調査区の東西の微高地で弥生時代の遺構は検出された。遺構は竪穴住居跡、溝、土坑などである。住居は調査区の北東で1棟確認され、床面から弥生時代後期の小形の甕が出土した。また炭化した木材も検出され、焼失住居の可能性も考えられるが、住居の大半は調査区外であるため判然としない。溝は調査区の西端で検出された。この溝も調査区外に延びているため全体の規模は不明であるが、検出した部分で幅が最大約2mあった。溝内からは弥生時代前期末～中期後半にかけての土器が出土した。主体となるのは壺や甕などである。また土坑のうちの1つには壺を横位にした状態で、口縁部に別個体の胴部で蓋をしたものが検出された。出土状態から考えて、土器棺と想定される。この壺は弥生時代中期後半のもので、旧河道上で確認された。

奈良時代の遺構は掘立柱建物跡2棟、集石土坑、区画溝4条、土坑などである。また調査開始直後の機械による盛土掘削時に盛土と江戸～明治時代の耕土との境において大量の布目瓦の散布が見られた。最も集中していたのは、調査区の南東隅である。また同地点からは鴟尾片が出土し、原位置を保っているとは言えないが、付近に市之郷廃寺が位置した可能性は濃厚となった。調査区のほぼ中央、旧河道と微高地の境辺りにN1°Eに主軸をもつ、幅約2mの素掘り溝を調査区の南端から北端まで検出した。更にこの溝と直交して東西に走る3条の溝を検出した。溝からの遺物は少なく

調査地の位置図（「姫路南部」）

溝内土器出土状況

土器棺検出状況

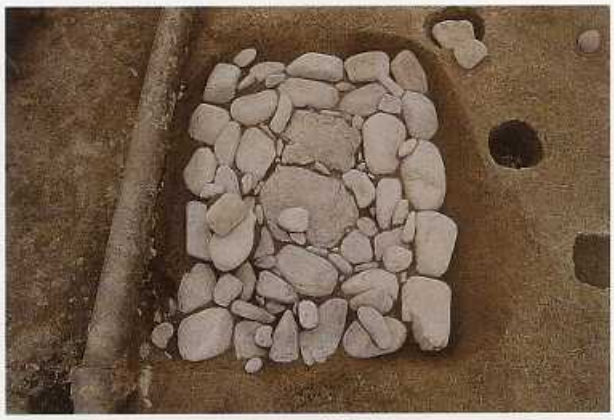
方形掘方を持つ掘立柱建物跡

明確な時期は決めがたいが、出土した土師器や須恵器は7世紀後半から8世紀前半にかけてのものである。溝内からは布目瓦がわずかしか出土していないが、市之郷廃寺に関連する区画溝と想定される。また前述した鴟尾ないし布目瓦も溝より東から出土している。掘立柱建物跡は方形の掘方を持つもので、3間×3間の総柱のものと2間×2間のものである。いずれも先の溝と平行している。集石土坑は径約1mで円形を呈しており、こぶし大のやや偏平な河原石が用いられている。調査区の東端で検出された。土坑からは布目瓦などが出土したが明確な時期は不明である。この時期の遺構は調査区の東側に集中して確認され、市之郷廃寺は区画溝より東の微高地に想定される。

中世の遺構は井戸、埋甕、溝、土坑墓などである。井戸は径約90㎝、深さ約2mの石組みである。埋甕は東播系須恵器を用いており、井戸と共に調査区の東端で検出された。溝は調査区のほぼ中央の旧河道上にあり、幅2mで北側がL字形に曲がっている。南側にもそれと平行するような溝があることから区画溝と考えられる。その内側から石組み土坑墓2基、木棺墓1基、土坑墓4基が検出された。また溝の内側には建物跡などの日常生活の痕跡がないことからこの溝は墓域を区画する性格を有するものであると想定される。木棺墓からは鎬蓮弁文を表面に描いた龍泉窯の青磁碗が出土した。

今回の調査において、市之郷廃寺に関連すると考えられる遺構が検出され、寺は調査地より東側に本体があるものと想定される。今後の調査の進展に期待したい。また調査区中央の旧河道上は弥生時代の土器棺を始めとし、中世には墓地として機能しており、この場所は墓地（ケガレ）の空間として選地されたものと考えられる。

区画溝（南から）



石組み土坑墓

木棺墓出土龍泉窯青磁碗

埋甕

3. 辻井遺跡（つじい）　（第25次・第26次）

1.所 在 地　姫路市辻井一丁目
2.調査面積　94㎡（第25次）、42㎡（第26次）
3.調査期間　平成12年4月18日～平成12年5月27日（25次）
　　平成12年9月21日～平成12年10月20日（26次）
4.担 当 者　小柴

辻井遺跡は、縄文～奈良時代にかけての集落跡である。また、白鳳時代の寺院跡である辻井廃寺も存在し、水田の中に塔心礎が残されている。今回の第25・26次調査は、共に宅地造成に伴って実施した。以下、調査次数ごとに概要を述べる。

第25次調査は、擁壁工事を施工する幅約80㎝、総延長約117mの範囲で実施した。調査区は屈曲部で区切って北から1～6区と設定し、縄文～弥生時代、奈良時代の遺構を確認した。そのうち、縄文時代の遺構を検出したのは、1、4、5、6区である。このうち1区からは、縄文時代晩期の土坑を1基確認した。土坑は、長さが約7m、幅は不明である。床面は被熱し、焼土化していた。同様の土坑が、4区でも1基見つかっている。5区からは、土坑墓3基、土坑1基を確認した。土坑墓からは、人骨の一部が出土し、屈葬の状況が判る例もあった。5区のすぐ西側では、昭和15年に今里幾次氏らが行った発掘調査によって、屈葬人骨が1体出土したが、その後、同時期の遺構は全く検出されていなかった。しかし、今回の調査成果により、付近に縄文時代の墓域が存在した確率が高まったと言える。また土坑は、断面がフラスコ状を呈する、袋状ピットと呼ばれるものであった。用途としては、貯蔵穴の説が有力である。埋土の上層からはイヌ科と考えられる獣骨が見つかった。出土状況からピットを転用して埋葬された可能性もある。6区でも袋状ピットが1基確認された。

弥生時代の遺構が見つかったのは、2、3区である。共に南北方向に延びる弥生時代中期の溝を1条ずつ検出した。幅は1.5m前後である。

奈良時代の遺構を確認したのは、3～6区である。全て方形掘方の柱穴である。

第26次調査は、下水道管を敷設する、幅約80㎝、長さ約50mの範囲で実施した。検出したのは、弥生時代中期の溝2条、土坑などである。

調査地の位置図（「姫路北部」）

5区　全景（北から）

5区　土坑墓（南から）

5区　袋状ピット（東から）

4. 今宿丁田遺跡（いまじゅくちょうだ） （第8次）

1.所 在 地　姫路市今宿
2.調査面積　25㎡
3.調査期間　平成12年8月5日～平成12年9月4日
4.担 当 者　小柴

今宿丁田遺跡は、縄文～弥生時代および、奈良～平安時代にかけての遺跡である。昭和48年度から7次にわたって調査が行われてきた。その大半が旧河道の範囲内にあたり、昭和55年度の第2次調査では、銅鐸の石製鋳型が出土している。また、昭和57年度の第5次調査では、河道西岸に集落跡の存在が明らかとなった。

今回の調査は、店舗建設に伴い、約2.5m四方の調査区を4ヶ所設定した。このうち最も南に位置する1区から、弥生時代中期の遺物を大量に含む、暗灰色粘土層を確認した。すぐ西隣で実施した第6次調査では、旧河道の東岸および支流を確認しており、1区で確認した土層は、この支流の埋土にあたると考えられる。

調査地の位置図（「姫路北部」）

1区　全景（西から）

5. 太市周辺確認調査（おおいち） （第1次）

1.所 在 地　姫路市太市中・西脇
2.調査面積　43㎡
3.調査期間　平成12年12月6日～平成12年12月14日
4.担 当 者　小柴

姫路市北西部の太市地区において実施された、下水道工事に伴う確認調査である。工事範囲は、古墳時代末の群集墳である西脇古墳群、奈良時代の創建とされ、塔心礎が残る西脇廃寺、古代山陽道に設置された、大市駅家跡（おおいちのうまや）想定地である向山（むかいやま）遺跡の一部を含んでいた。そこで、掘削範囲に43ヶ所の試掘坪を設定し、確認調査を実施することとなった。向山遺跡、西脇廃寺では、初めての発掘調査である。調査の結果、ほとんどの坪で工事による掘削が遺構検出面まで及ばないことが判明した。しかし、西脇廃寺の想定範囲内に設定した坪No.14の断面からは、方形掘方の柱穴と考えられる遺構を検出した。また、向山遺跡の範囲内である坪No.33、34からは、古代の平・丸瓦が出土した。

調査地の位置図（「龍野」）

坪No.14　断面（北から）

6.（仮称）船場川東区整遺跡（第15次）

（せんばがわひがし）

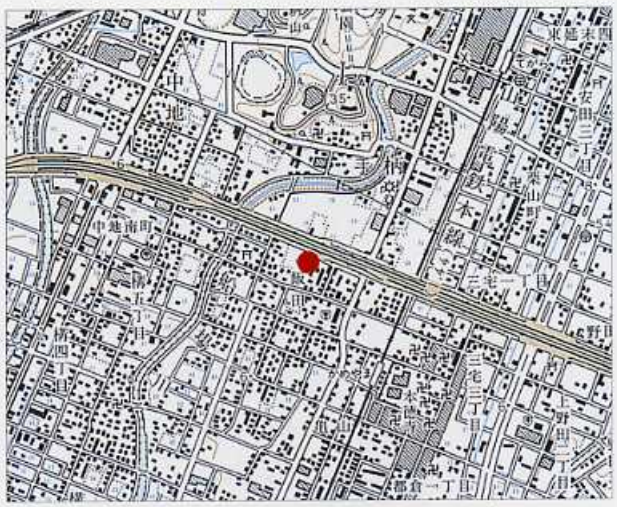
第6地点14区

1.所 在 地　姫路市飯田
2.調査面積　30㎡
3.調査期間　平成12年7月7日～平成12年8月25日
4.担 当 者　小柴

遺跡は、市街中心部を流れる船場川の下流東岸に所在する。付近では、土地区画整理事業に先だって、昭和61年度から確認調査を行い、縄文～平安時代の遺跡が6ヶ所で発見された。これらを第1～6地点と仮称し、これまでに延べ14次（約9,000㎡）の調査を実施してきた。その結果、第1地点のみが縄文時代の遺跡であることが判明し、正式名称を大鳥遺跡と命名した。その他の第2～6地点は、弥生～古墳時代、平安時代の集落跡である。

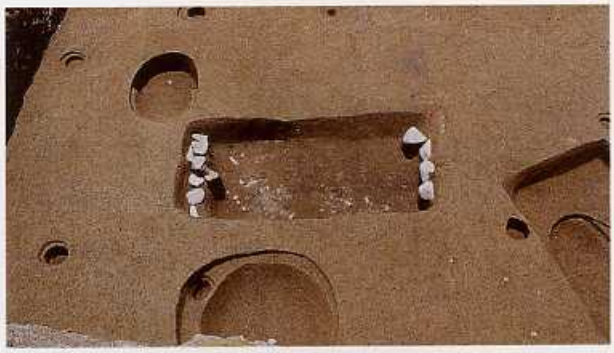
第15次にあたる今回は、防火水槽設置に伴い発掘調査を実施した。調査地である飯田公園は、第6地点に位置している。公園の東および南側道路で実施した第7次調査では古墳時代の竪穴住居跡などが確認された。

5.5m四方の調査範囲で見つかったのは、弥生時代の土坑墓1基、古墳時代の竪穴住居跡2棟、ピットなどである。土坑墓は、長辺1.9m、短辺0.8mの長方形で、短辺両側には河原石が並べられていた。竪穴住居跡は、調査区の北西隅と南東隅で確認し、それぞれSH01、SH02とした。形は共に方形と考えられるが、住居の一部を検出したのみで、全体の規模は不明である。このうち、SH01の中からは、竪穴住居跡の主柱穴と考えられる柱穴1基と、作りつけのカマド跡を確認した。見つかったのは、住居跡の南壁である。大きさは、約50㎝四方の方形で、住居の外に向かって延びる煙道の一部も残っていた。壁は、竪穴住居築造時に地面を掘り残して造られ、厚さは約20㎝を測る。内側や床は被熱して焼土化し、炭が堆積していた。カマド跡の周辺からは、土師器の高杯などが出土した。また、SH01の外縁では壁に沿って、柱穴が4基検出されている。住居の壁部では周溝が確認できなかったため、壁構造に関連する遺構である可能性がある。SH02からは須恵器の有蓋高杯が出土した。杯部の約1/2が残存するのみで脚部は失われていた。復元口径は約11㎝で、時期は6世紀前半に比定される。



調査地の位置図（「姫路南部」）

調査区　全景（東から）



土坑墓（北から）

竪穴住居SH01（北から）

7. 佐土（さづち）・東芝崎（ひがししばさき）遺跡　（第2次）

1.所 在 地　姫路市別所町佐土
2.調査面積　189㎡
3.調査期間　平成13年3月1日～平成13年3月30日
4.担 当 者　大谷

別所町は、姫路市の東端に位置し、高砂市と境界を接している。平成2年度から別所土地区画整理事業に伴って発掘調査を行い、縄文時代、古墳時代、平安～室町時代をそれぞれ中心とする遺跡を新たに5ヶ所発見した。

これらの遺跡の中で最も古く位置づけられるこの遺跡は、北から南へと延びる微高地の西縁辺から谷部にあたる。区画整理道路工事に伴う第1次調査では、谷部の堆積層中に縄文時代晩期の土器包含層を確認している。

今回の第2次調査は、マンション建設に伴うもので、遺跡が影響を受ける基礎部分のみを対象とした。調査地は、遺跡のほぼ中心にあたっているが、明確な時期を示す遺構・遺物は見つからず、旧流路かと思われる時期不明の東西方向の落ち込みなどを検出した。

調査地の位置図（「姫路南部」）

調査区北部　全景（北東から）

8. 別所構居（べっしょこうきょ）跡　（第15次）

別所土地区画整理事業に伴う

1.所 在 地　姫路市別所町別所
2.調査面積　192㎡
3.調査期間　平成12年9月7日～平成12年11月25日
4.担 当 者　小柴

事業地内では、区画整理道路予定地の発掘調査を14次にわたって実施してきた。今回の第15次調査は、第13次調査区の北隣が対象地となった。付近には中世の館、別所構居跡の存在が想定されている。第13次調査では、堀と推定される東西方向および南北方向の溝や、土坑、ピットなどが確認された。しかし、今回の調査区は後世の削平が激しく、ほとんど遺構が残存していなかった。ただ、調査区の東端に沿って南北方向の溝が見つかった。西肩を検出したのみで、幅は不明である。この溝は、第13次調査において堀の可能性が指摘された、南北方向の溝の続きであると考えられる。その他、江戸時代の土坑4基を確認した。

調査地の位置図（「加古川」）

調査区　全景（南から）

9. 山ノ鼻（やまのはな）遺跡　（第1次）

1.所 在 地　姫路市林田町下伊勢
2.調査面積　80㎡
3.調査期間　平成13年1月24日～平成13年2月27日
4.担 当 者　多田

山ノ鼻遺跡は、大津茂川上流沿いに位置する古墳～平安時代の遺物散布地である。周辺一帯は既に圃場整備が行われており、旧地形は失われていた。

今回、大津茂川東岸の堤防道路工事に伴い、擁壁部分について、南北40m×幅2m分の発掘調査を実施した。

調査地には、厚さ約0.8～1.2mの堤防盛土がある。その下には、黄褐色粘質土の基盤層との間に、遺跡の時代にまで遡ると考えられる灰オリーブ色で厚さ10～30㎝の土層が確認された。調査区中程には、幅約2.3m、深さ約50㎝の東西溝が見つかっている。大津茂川へ東側から流れ込む自然流路と見られる。

今回、明確な遺構は確認できなかったが、圃場整備盛土下でも遺跡が残存している可能性が指摘できよう。

調査地の位置図（「龍野」）

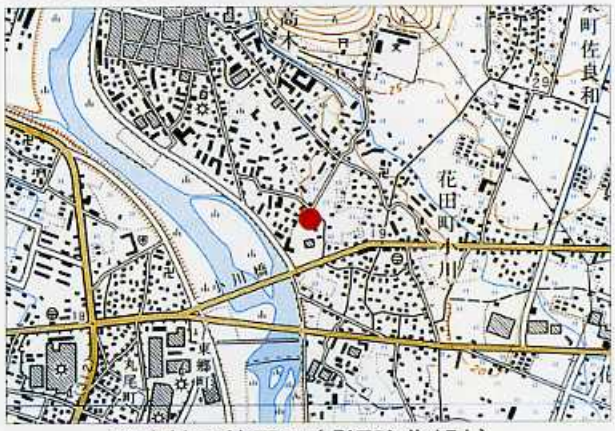
調査区　全景（南東から）

10. （仮称）小川（おがわ）散布地　（第1次）

1.所 在 地　姫路市花田町小川
2.調査面積　35㎡
3.調査期間　平成13年1月31日～平成13年2月27日
4.担 当 者　大谷

県道市川左岸線建設事業に伴い、平成4年度から兵庫県教育委員会によって分布・確認調査が行われ、新たに発見されたのがこの遺跡である。調査の進展に伴って、県道部分は高木遺跡と改名されたが、残りの部分については、従来からの呼称を用いている。

今回の調査は、県道予定地内にある姫路市高木前処理場の一部移転に伴う皮革幹線部分（幅1.55m×延長23m）の全面調査である。調査地のすぐ西側では、平成12年度に県道予定地内の全面調査がなされ、7世紀代の鍛冶関連遺構や11世紀代の掘立柱建物跡などが見つかっている。これらの遺構は砂礫で構成された中州状の微高地に立地すると考えられている。今回の調査区も同じ微高地上に位置するが、調査区が狭小であることもあり、遺構は見つからなかった。



調査地の位置図（「姫路北部」）

調査区　全景（西から）

11. 和久（わく）遺跡確認調査　（第1次）

1.所 在 地　姫路市網干区和久
2.調査面積　64㎡
3.調査期間　平成12年10月18日～平成12年10月27日
4.担 当 者　小柴

和久遺跡は、姫路市西部を流れる大津茂川の下流西岸に位置している。表採された遺物から弥生時代の集落跡と推定されていたが、発掘調査が実施されたことはなく、実態は不明であった。今回の調査地は、当初予想していた遺跡の範囲外であったが、工事に伴う掘削の結果、弥生～古墳時代の遺物が出土した。このため、遺構の有無を判断する目的で、確認調査を実施することとなった。試掘坪は掘削範囲内で東西、南北方向に各4列、合計16ヶ所配置し、北側の列の西端から順にNo.1～16とした。

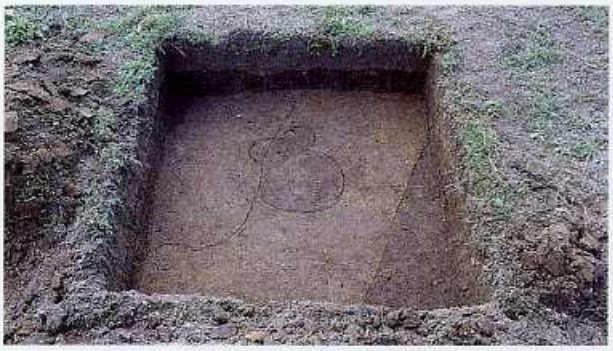
調査の結果、16ヶ所の内、15ヶ所で遺構を確認した。このうち竪穴住居跡を確認したのは、坪No.6・8・9・10・11・12・13・15・16の9ヶ所である。調査範囲が2m×2mと狭く、掘削も最小限にとどめたため、住居の形や時期など詳細は不明である。しかし、坪No.6からは古墳時代初頭と考えられる、完形の鉢と壺の底部が出土した。また、坪No.16からは弥生時代後期の甕が出土した。その他、坪No.1・2・3・5・7・14では、ピットや溝などが確認された。

以上の成果によって、和久遺跡が弥生時代後期～古墳時代の集落跡であること、遺跡の範囲が当初の予想より南に広がっていることが確定した。また、今回の調査地で工事範囲の全面調査を実施することが決定し、平成12年12月～平成13年5月にかけて発掘調査を行った。調査成果は来年度発行の『TSUBOHORI』に掲載する。

調査地の位置図（「網干」）

調査区　遠景（南西から）

坪No.6　鉢出土状況（北から）


坪No.11（北から）

坪No.6（北から）

12. 阿保（あぼ）地区試掘調査　（第2次）

阿保土地区画整理事業地

1.所 在 地　姫路市阿保
2.調査面積　260㎡
3.調査期間　平成13年1月30日～平成13年3月29日
4.担 当 者　中川

調査地の位置図（「姫路南部」）

姫路市の計画する土地区画整理事業に伴って、遺跡の有無を確認するために、平成11年度から試掘調査を実施している。本年度は2年目にあたる。

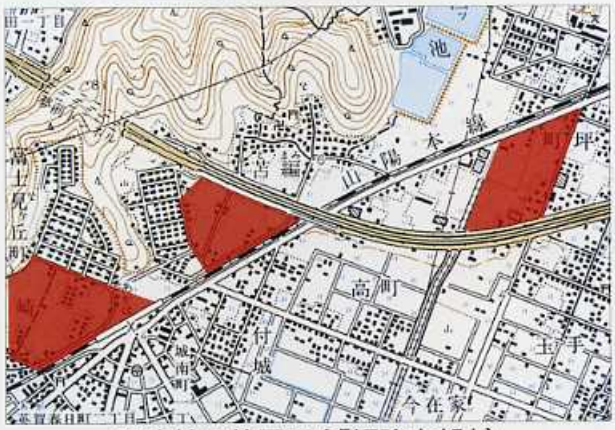
調査範囲は事業地の内約14haを対象とし、試掘坪の数は65ヶ所である。対象範囲は西側と東側とに分けることができる。西側の調査範囲は全体が旧河道に該当し、遺跡が存在する可能性は低い。東側の試掘坪のうち、20ヶ所から遺構が確認された。坪No.35においては素掘り井戸と土坑とを検出した。井戸は全体の3/4が調査区外にあるため詳細は不明である。中から7世紀後半の須恵器杯が出土した。その他の坪からも奈良～平安時代を主体とした遺物が出土している。以上の成果から東側の調査範囲を阿保遺跡第2地点と命名した。

坪No.35（南から）

13. 英賀保（あがほ）駅周辺試掘調査　（第1次）

英賀保駅周辺土地区画整理事業地

1.所 在 地　姫路市町坪・苫編・飾磨区山崎
2.調査面積　432㎡
3.調査期間　平成12年12月29日～平成13年3月23日
4.担 当 者　中川



調査地の位置図（「姫路南部」）

英賀保駅周辺地区は付城山（つけしろやま）群集墳や鳥形木製品を出土した四ツ池（よついけ）遺跡などがあり、周辺には条里型地割が良好に残っている。

この地区において区画整理が行われることとなり、それに先駆けて試掘調査を行うこととなった。対象範囲は約69haに及ぶため、3ヶ年計画で行うこととし、本年度はその1年目にあたる。調査の結果、山崎地区で1ヶ所、町坪地区で2ヶ所の遺跡を確認した。それぞれ英賀保駅周辺遺跡第1・第2・第3地点と命名した。第1地点は夢前川の形成した自然堤防上に立地し、土坑などが確認された。第2地点では、条里型地割に平行する溝などが確認された。第3地点においては、坪No.113で室町時代の石組み井戸が検出された。径は約80cmで、最下部に桶を置いていた。

坪No.113（北から）

姫路城跡における発掘調査の動向

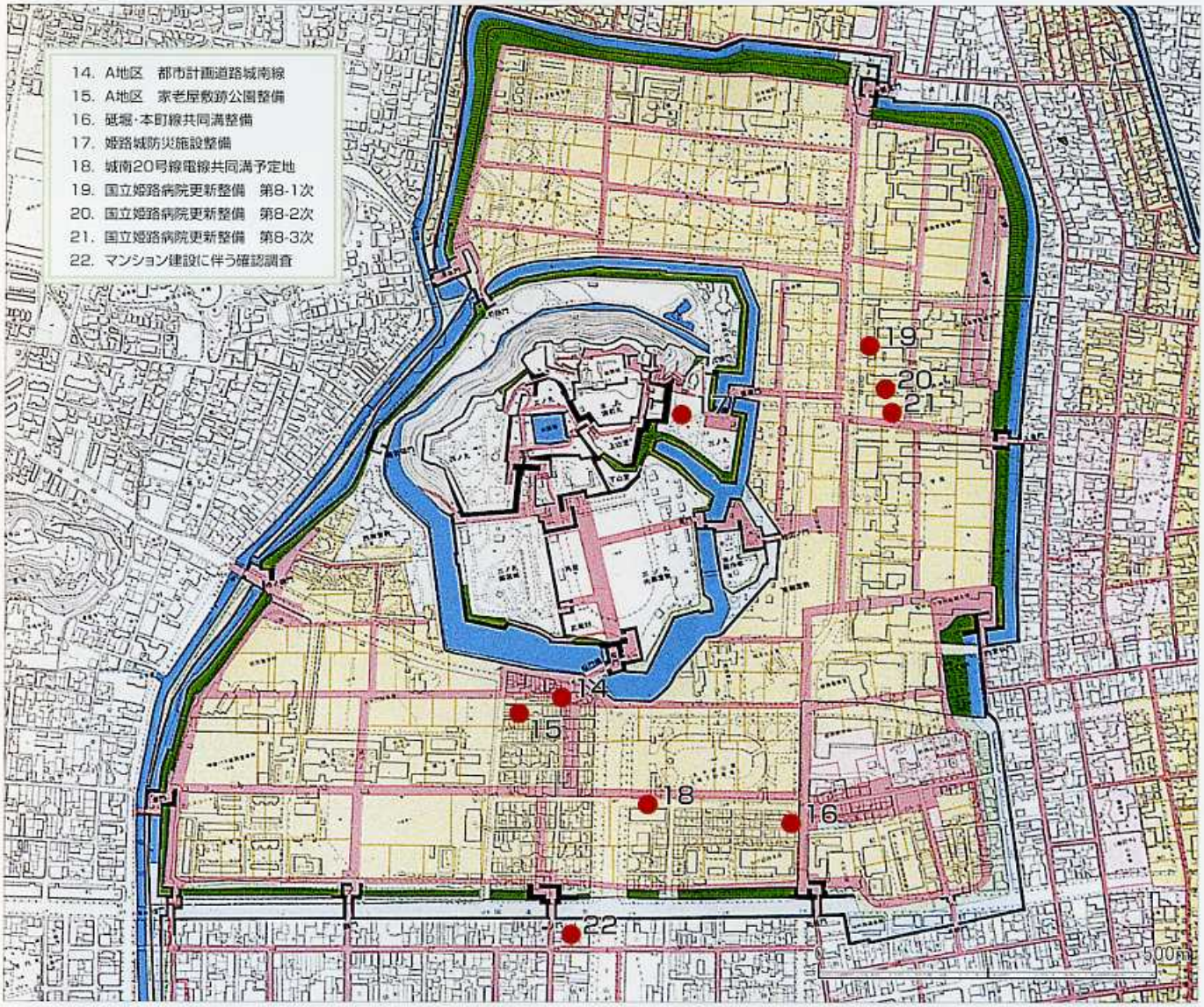
姫路城は内・中・外と三重の堀により区画され、中堀以内の大半が特別史跡に指定されている。内堀内が城郭部、中堀内が武家屋敷地区、外堀内は町家や寺町となっていた。

平成12年度は内堀内で1ヶ所、中堀内で7ヶ所の発掘調査を実施した。また、町家地区においても中ノ門南側のマンション建設予定地でトレンチを設定して調査を行った。

城内では、江戸時代の絵図に描かれた「米蔵」跡と推定される城郭関連遺構が発見されている。

中堀内の武家屋敷地では、A地区において側溝や暗渠を伴う城下町街路が検出されている。排水に関する近世の都市計画についての資料になるであろう。また、国立姫路病院では庭園池やゴミ穴、井戸などを調査し、屋敷内の構成と変遷の手掛かりを得た。マンション建設予定地では江戸時代の層が撹乱を受けており、町家遺構については不明である。ただ、下層において須恵器片などを含む、厚さ1m以上の暗褐色土層を確認し、古代における河川などの存在が推定された。

マンション建設予定地トレンチ状況（北東から）



姫路城跡発掘調査地の位置図（この図は現況の地図に江戸時代後半の絵図を合成したものである。）

14. 特別史跡姫路城跡　（第188次）

A地区　都市計画道路城南線整備

1.所 在 地　姫路市本町68番地
2.調査面積　357㎡
3.調査期間　平成12年7月4日～平成12年12月15日
4.担 当 者　森

調査地は姫路城桜門（大手門）のすぐ南側に位置する。酒井氏時代の絵図『姫路侍屋敷図』によれば、調査地付近で中ノ門から北上した街路が桜門前の広場に突き当たり、この南北街路に面して武家屋敷地が広がっていた様子が窺える。街路西側には当時の家老であった高須隼人（たかすはやと）の邸宅があり、その北には厩（うまや）が置かれていた。

今回の調査は、家屋撤去が新たに完了した2ヶ所を対象とした。上述の『姫路侍屋敷図』と対比すると、1区は桜門前の広場部分に、2区は南北街路の北端部、桜門前の広場と合流する付近に相当している。

1区では、現地表面から30～40㎝下で、赤褐色ないし黒褐色を呈する風化礫を大量に包含する層が見られた。広場部分を造成するために近隣の丘陵などから搬入されたものと考えられる。この層の下には、土師器細片を包含し締まりの良好な暗灰黄色土層が存在し、現地表面から70～95㎝下で黄褐色基盤層に達する。暗灰黄色土層上面で江戸時代の町割り形成以前に遡る可能性をもつ石組み遺構、土坑などを検出した。

2区では、現地表面から約50㎝下で南北街路の西側溝に相当する石組み溝を検出した。両側壁のみに石材を使用し、底面には敷石などを伴わない。使用石材は凝灰岩を主体としており、石組みの内法幅65～70㎝、現存部の高さ40～50㎝を測る。ただ、調査区北部では内法幅が約100㎝に広がっていた。

溝は調査区の北西隅付近で西に折れ、平成11年度の調査（第180次調査）で確認した東西方向の石組み溝に接続する。このコーナー部が南北街路西側の武家屋敷地（『姫路侍屋敷図』では厩の敷地）の北東隅に相当する。コーナー部は直角に屈折するのではなく、隅を切り取るかたちで二段階に折れ曲がっていく。水流を円滑化する工夫であろう。また、溝の東側壁（街路側）では小形の石材を組み合わせてコーナーを作っているのに対し、西側壁（武家屋敷地側）では屈折部に大形の偏平な石材を据え付け、この石材を加工

『姫路侍屋敷図』と対照した調査地の位置

1区　全景（南から）

2区　全景（南から）

して角を造り出していた。武家屋敷地側には街路に面して土塀が設けられていたと想定されることから、コーナー部の基礎補強を図ったものと考えられる。

さらにコーナー部を精査した結果、東側壁の屈折部で西に折れていく石組みとは別に、そのまま北に直進する石組みが存在することが判明した。北への延長部は未確認であるが、内堀と連なる何らかの排水施設が存在する可能性も否定できない。

調査区の中央やや南寄りで、石組み溝に直交する溝状の遺構を検出した。幅約115cmの溝の底に長方形に加工した凝灰岩の板石を1列に敷き並べ、掘方の側面に小形の石を積み上げた構造をもつ。検出位置を『姫路侍屋敷図』と対照すると、この遺構は南北街路の下を東西に走行し、街路の東西両側の石組み溝を結合する暗渠である可能性が高い。本来、石製あるいは木製の側壁および天井部を有したものと思われるが、今回の調査では具体的な構造を判断できる資料は得られなかった。また、暗渠が石組み溝に接続する部分では、石組み溝西側壁の石に幅約15cmの縦方向の溝が刻まれている。この溝に間仕切り板などを差し込み、必要に応じて水位調整を図ったものと考えられる。

石組み溝及び暗渠内からは、酒井氏の家紋である剣酢(けんかたばみ)紋軒丸瓦を含む瓦とともに、19世紀代を主体とする陶磁器が少量出土した。これらの遺構が最終的に機能を終了したのは、明治時代に入って周辺が城南練兵場に転用された時点と想定される。一方、遺構の構築時期を示す資料は得られなかった。城下町絵図を見るかぎり、当該部では街路の位置などの基本的な町割りは、17世紀初頭から幕末にいたるまで変化していない。排水施設が街路の敷設時に設けられたものであれば、改修を重ねながら江戸時代を通じて使い続けられたのかもしれない。

以上述べてきたように、今回の調査では、南北街路側溝の検出により、街路西側の武家屋敷地の東端ラインが確定したとともに、武家屋敷地における排水施設の一端が明らかになった。

下層の調査では、江戸時代以前に遡る土坑などを検出した。出土遺物からみて16世紀代の遺構が主体的である。これらは、第180次調査で検出した堀とともに、池田氏による城下町整備以前の当該部の様相を知るうえで重要な資料とみることができよう。

2区　石組み溝コーナー部

2区　暗渠

2区　石組み溝西側壁の石に刻まれた溝

2区　下層で検出した土坑

15. 特別史跡姫路城跡　（第187次）

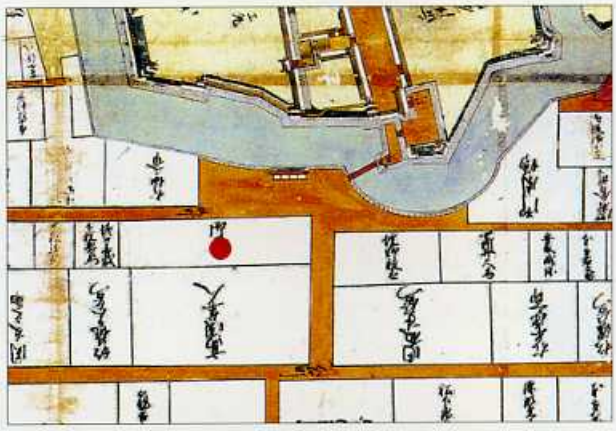
A地区　家老屋敷跡公園整備（便益施設予定地）

1.所 在 地　姫路市本町68番地
2.調査面積　430㎡
3.調査期間　平成12年7月4日～平成12年10月31日
4.担 当 者　森

特別史跡姫路城跡A地区の公園整備事業に伴い、便益施設（A棟）の建設予定地の発掘調査を実施した。調査地は酒井氏時代の『姫路侍屋敷図』と対照すると、家老高須隼人邸の北側に配された厩の敷地南部に相当する。遺構確認調査の結果、厩の建物は敷地の北縁に沿って東西に延びていたことが判明している。一方、南部では土坑、井戸などを検出しているが、建物以外の空間がどのように活用されていたのかを明確に示す資料には恵まれていない。なお、第2次松平氏時代（1667～1682）以前の城下町絵図では当該部に厩は描写されておらず、武家屋敷となっている。17世紀中～後期に屋敷地をいくつかまとめて厩に転用した可能性が高い。

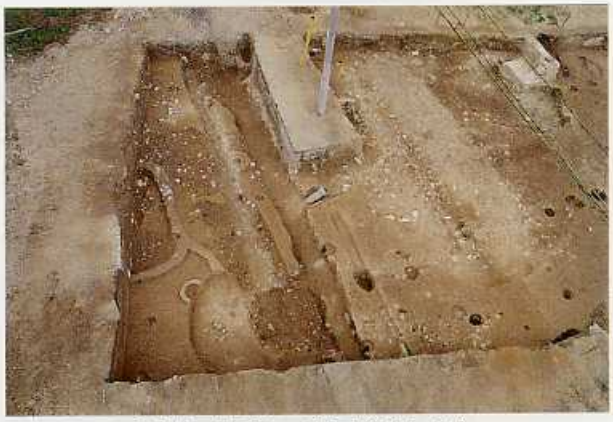
調査区内では、現地表面から約40cm下で江戸時代の整地層の可能性をもつ褐灰色土層が認められる。この層の下にはにぶい黄褐色土層、土師器細片を包含する灰黄褐色土層などがみられ、現地表面下約75～100cmで黄褐色基盤層に達する。

検出した遺構は土坑、ピットが主体的である。調査区南部を中心に、切り合った状態で検出された。土坑からは瓦などが大量に出土しており、廃棄坑と考えられる。時期は17世紀から18世紀にかけてのものが中心である。このうち17世紀代に遡る土坑は、武家屋敷段階、あるいは武家屋敷から厩に転用された段階の遺構である可能性が高い。また、厩に転用された後の様相ははっきりしないが、調査区中央部付近の遺構分布が希薄であること、17世紀代の土坑が埋まった後、上面を整地した形跡が一部で認められることから、空閑地となっていたことも想定されよう。一方、調査区南部では18世紀以後と考えられる土坑も認められることから、敷地の裏手は武家屋敷段階から引き続いてゴミ捨て場になっていた可能性もある。今後、武家屋敷段階の遺構と厩段階の遺構を明確に識別することによって、当該部の土地利用の変遷が解明されることを期待したい。



『姫路侍屋敷図』と対照した調査地の位置

調査区北部　全景（北から）



調査区南部　全景（東から）

調査区南部　土坑土層断面

16. 特別史跡姫路城跡　（第194次）

砥堀・本町線共同溝整備

1.所 在 地　姫路市本町68番地・総社本町
2.調査面積　92㎡
3.調査期間　平成13年2月28日～平成13年3月30日
4.担 当 者　秋枝・森

県道砥堀・本町線の共同溝整備事業に伴い、道路西側歩道部および横断部の調査を実施した。江戸時代の城下町絵図によると、調査地の大半は総社門から北進する街路の西端付近に当たり、道路横断部の一部が総社門内の武家屋敷地に相当する。また、調査地は古代の播磨国府跡に比定される本町遺跡にも含まれている。

調査の結果、とくに歩道部では上下水道、ガス、電気管路の埋設による撹乱が著しく、江戸時代以前の土層はごく断片的にしか残っていない状況であった。遺構が保存されている部分では、黄褐色基盤層上面で少数の土坑、ピットを検出した。土坑からは布目瓦などが出土しており、本町遺跡関連の遺構と想定される。なお、江戸時代の武家屋敷、街路に関する明確な遺構は確認できなかった。

『姫路侍屋敷図』と対照した調査地の位置

歩道部調査区　全景（北から）

17. 特別史跡姫路城跡　（第192次）

内曲輪　姫路城防災施設整備

1.所 在 地　姫路市本町68番地
2.調査面積　88㎡
3.調査期間　平成12年12月26日～平成13年3月16日
4.担 当 者　森

姫路城内曲輪の防災施設整備事業に伴い、地下配管部および防災カメラなどの設置個所の調査を実施した。調査地点は喜斎（きさい）門内から「との四門」にかけての部分（東部調査区）と、西の丸南部高石垣下の鷺山口（さぎやまぐち）門想定部付近（西部調査区）に大きく分かれる。

東部調査区では、現地表面から約40cm下で橙色の山土層を確認し、この上面で礎石と考えられる石材を検出した。絵図に描かれた米蔵の遺構である可能性を有する。また、西部調査区では表土直下で石階を検出した。検出個所は鷺山口門想定部と合致するが、使用石材や土層の状況からは近代以後の遺構である可能性も否定できない。

なお、今回の調査では配管に必要な深度までで調査を終了したため、下部の状況は確認していない。

東部調査区　礎石

西部調査区　石階

18. 特別史跡姫路城跡　（第189 次）

市道城南20号線電線共同溝予定地

1.所 在 地　姫路市本町68番地
2.調査面積　120㎡
3.調査期間　平成12年8月19日～平成12年11月16日
4.担 当 者　多田

市道城南20号線のうち、大手前通りと御幸通りとの間の東西64mを西から1～5区に分けて、幅2mで発掘調査を実施した。昨年度の調査区から西側へ続く位置である。

調査では、道路舗装下に空襲焼土の整地層をはさみ近世の城下町面が検出された。その下は黄色粘質土層があり、古代の播磨国府関連と推定される遺構を検出している。

全体に、下水管やガス管による撹乱を受け、遺構の残りは良好といえない。近世の遺構としては、ゴミ穴と見られる土坑や円形の素掘り井戸、溝などが見つかっている。

古代については、3･4区に平安期の須恵器･土師器の細片を含む粘質土層があり,当時この辺りが低湿な状態にあったことが確認できた。さらに、3区で幅約3mの南北溝を検出している。

2区　全景（南西から）

3区　全景（南東から）

19. 特別史跡姫路城跡　（第190次）

国立姫路病院更新整備　第8－1次

1.所 在 地　姫路市本町68番地
2.調査面積　30㎡
3.調査期間　平成12年9月20日～平成12年11月8日
4.担 当 者　多田

調査は南北15m×幅2mのトレンチを設定して行った。

厚さ約50㎝の近代盛土下に、約20㎝の暗灰黄色粘質土層と薄いシルト層があり、褐色シルト質土層の遺構面にいたる。

遺構は土坑が5基、ピットが10基余り検出された。ピットの埋土は灰色のやや粘質土で近世の陶磁器細片が出土しており、城下町の武家屋敷に伴うものと推定される。ただ、建物としては復元できず、性格は不明である。

調査区北側には、深さ約60㎝の大型土坑が確認されている。武家屋敷の屋敷境想定位置に近く、屋敷裏のゴミ穴と考えられる。その下から、径約1mの円形土坑03も見つかった。土坑は底部分が残存するのみであったが、17世紀前半の土師器皿や唐津焼の碗、備前焼片、貿易陶磁器の青花や白磁片などが出土している。

調査区　全景（北東から）

土坑03出土遺物

20. 特別史跡姫路城跡　（第191次）

国立姫路病院更新整備　第8−2次

1.所 在 地　姫路市本町68番地
2.調査面積　245㎡
3.調査期間　平成12年11月28日〜平成13年3月14日
4.担 当 者　多田

国立姫路病院の更新整備に伴う発掘調査で、旧本館治療棟と旧1病棟の間を1区、旧本館正面玄関の南西部を2区とする。1区は東西15m×南北13m、2区は東西7m×南北5mである。

1区では、厚さ約50㎝の近代の盛土層があり、その下に江戸時代の整地土と推定される約10〜20㎝の暗褐色ないし褐色細砂層が3層程度みとめられ、暗灰黄色の比較的締まりの良好な土層にいたる。この層は、城下町以前の旧耕土か表土とみられる。

盛土下では、近代の衛戍病院の煉瓦基礎が検出された。

江戸時代の面では、調査区中央に径約70㎝、深さ約2.2mの石組み井戸が見つかっている。石組み基礎には井桁状の胴木を据え、底は円形縦板組の桶状にしていた。

調査区南西部には、大型の土坑が集中して確認されている。土坑内からは土師器皿・堝のほか絵唐津の皿を含む唐津焼の碗・皿、備前焼擂鉢、瀬戸・美濃焼などの陶器が出土した。武家屋敷のゴミ穴と推定される。遺物から土坑が機能したのは江戸時代初期と考えられ、中・後期のものは見られない。城下町絵図によれば1区は武家屋敷東側を南北に通る「上岐阜町通」への屋敷出入口付近に位置する。ただ、絵図の表記の変遷を検討すると、江戸時代初期には出入口が南側に位置し、屋敷裏であった可能性が指摘される。大型土坑が江戸時代中期以降に設けられないのは屋敷内部の構成変化に合わせたものと考えられよう。

近世以前の暗灰黄色土層以下からは、ピットや南北溝などが検出され、須恵器や土師器の細片が出土している。

2区では、南側へ続く半円弧状の大型の落ち込みが検出された。深さは約30㎝で、縁辺には河原石を並べる。武家屋敷に伴う庭園池の北側護岸と推定される。列石は、最終的には一部が溝状に北側へ続くように改変されていた。

今回は、井戸・ゴミ穴・庭園池護岸など武家屋敷に伴う遺構が確認された。土坑の消長や池改変の痕跡は、内部構造の変遷を知るための手掛かりとなるであろう。

1区　全景（西から）

1区南壁　土層状況（北西から）

1区　井戸01断ち割り状況（南から）

2区　全景（南から）

21．特別史跡姫路城跡　（第193次）

国立姫路病院更新整備　第8−3次

1.所 在 地　姫路市本町68番地
2.調査面積　192㎡
3.調査期間　平成13年1月30日〜平成13年3月16日
4.担 当 者　山本

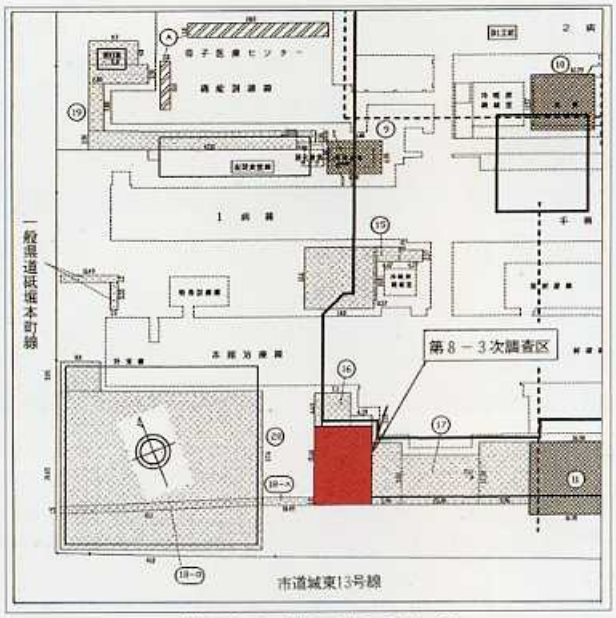
調査は、第8−2次に引き続き、国立姫路病院本館治療棟の南側で実施した。調査区の北端部では幅3〜4m分が撹乱を受けて遺構面が完全に損なわれていたが、南半部では遺構の残り具合が比較的良好で、江戸時代の石組み溝1条、街路遺構の一部、池1基、ピットなどが検出された。

調査区南端部で検出された石組み溝は、内法幅、深さともに約50cmの規模で、東西方向に走る。本溝の南側から街路遺構の一部が検出されたことから、本溝は道路側溝であり、かつ北側の武家屋敷との境界の溝でもあることが判明した。

街路遺構は、約20cmの間層を挟んで、上下2面の路盤工の跡が検出された。路盤工は小円礫混じりの固く締まった褐色土層からなり、下層が江戸時代初期の城下町造成時の、上層が幕末に近い頃の施工と推定される。

池は、北側の第8−2次調査区方向から南東方向に斜めに横断する形で検出され、最大幅8.5m、深さは60cmを測る。池内から出土した陶磁器の年代から、18世紀中頃から19世紀代の時期が考えられる。

以上の調査成果から、中曲輪の東西街路と、それに沿う武家屋敷（18世紀後半頃の城下町絵図によれば、「小野太一兵衛」宅に該当する）の一端が明らかになった。



国立姫路病院調査区位置図

『姫路侍屋敷図』と対照した調査地の位置

調査区全景（北から、手前が武家屋敷池、向こうが街路側溝）

池内の配石（亀の甲羅干し用か）

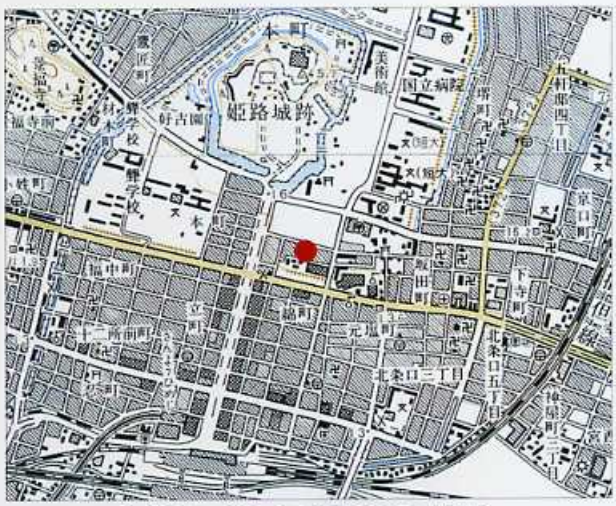
●こんなものでました●

魚を描いた南国の陶器　ー華南三彩盤ー

出土遺跡:特別史跡姫路城跡D地区　お城本町地区市街地再開発事業地内

あざやかな緑や黄色の釉。花びらを思わせる口縁のデザインーこの一見して「日本的でない」器は、姫路城中曲輪の武家屋敷地で見つかった華南三彩の盤(背が低い大形の鉢)です。

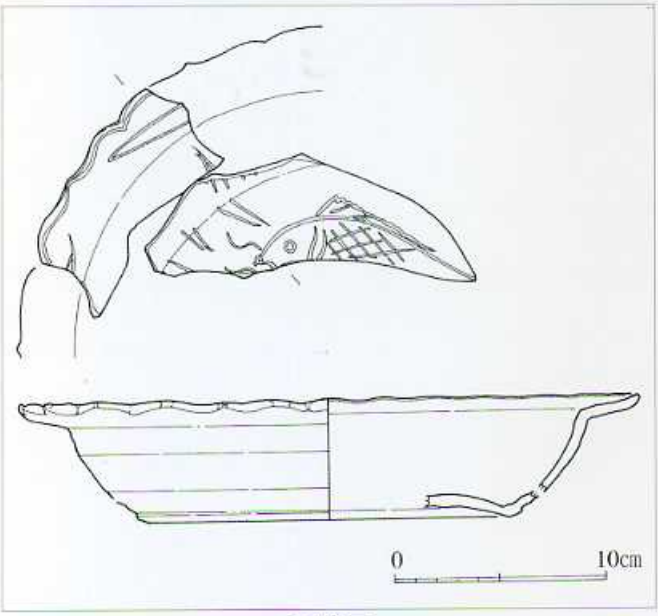
一部の破片しか出土していないため、全体のデザインは明らかでありませんが、内面の底部に線彫りで魚を描いています。目、口、えらぶた、背びれ、鱗に加えて、口元にひげの表現があることから、コイ科の魚でしょう。また、口縁のまわりには細長い草の葉状の描写がみられます。彩色は緑を基調に、線彫りの部分を黄色に塗り分けています。



出土地の位置図(「姫路南部」)

華南三彩は、その名が示すとおり中国南部地方で作られたと考えられる彩色陶器で、日本では古くから「交趾(こうち)焼」として珍重されてきました。交趾とは現在のベトナム北部地域を指す古名です。今回紹介した盤は、16世紀末から17世紀初頭にかけて日本にもたらされたものといわれ、堺環濠都市遺跡や大坂城跡などからも出土しています。器形や文様にはいくつかの種類が認められます。

16世紀末頃の美濃地方では、華南三彩の盤をモデルに、桃山陶器として著名な「黄瀬戸」の鉢を作ったといわれます。この異国情緒あふれる器は、当時の人々の目にどのように映っていたのでしょうか。



実測図

TSUBOHORI

平成12年度(2000)
姫路市埋蔵文化財調査略報

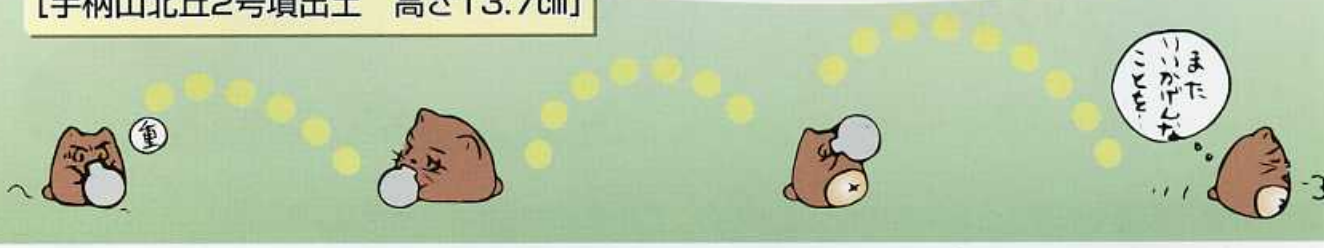
平成14年(2002年)3月31日

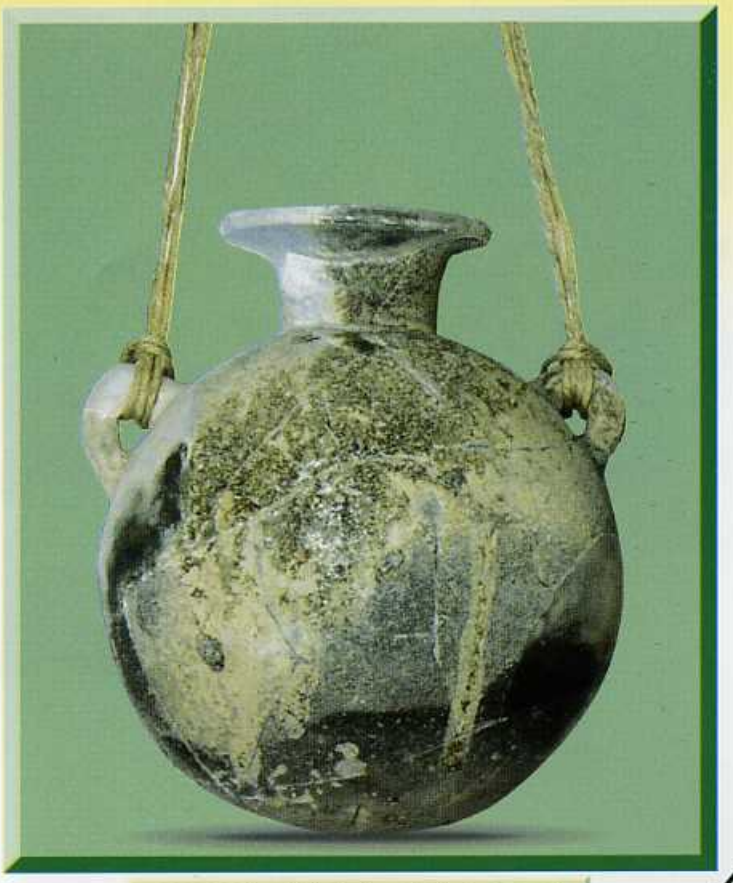
発行　姫路市教育委員会　文化部　文化課
兵庫県姫路市安田四丁目1番地
印刷　株式会社デイリー印刷
兵庫県姫路市飾東町佐良和15番地

まめだぬきしばこの 30秒考古学

これは提瓶（ていへい）と呼ばれている須恵器です。
古代の水筒（さげべ）ではないか？と考えられています。

[手柄山北丘2号墳出土　高さ13.7cm]





[見野長塚古墳出土　高さ24.6㎝]
※ヒモは推定です。